

人の身の上

小川未明

青空文庫

お花は、その時分叔父さんの家に雇われていました。まだ十七、八の女中でありました。小学校へいってたたつ子は、毎日のように叔父さんのお家へ遊びにいつていました。叔父さんも、叔母さんも、たつ子をかわいがってくださいましたから、ほとんど、自分の家も、かわりがなかつたのであります。

叔父さんの家には、お花のほかにも、もう一人お繁という女中がおりました。年はかえつて一つか二つ、お花よりは少なかったかもしれませんが、よく働いて、よく気がついて、気の短い叔父さんの氣にいらりましたけれど、どういふものかお花は、よくいいつかつたことを忘れたり、また、晩になると、じきに居眠りをしましたので、よく叔父さんから、小言をいわれていました。

「もつと、氣をしつかりもたなければならんじやないか。」と、叔父さんにいわれると、「はい……はい。」といつて、さすがに、顔を赤くして返事をしましたが、すぐ、その後から忘れたように、物忘れをしたり、夜になると居眠りをはじめました。

これにひきかえて、お繁のほうは、なにからなまでに、よく気がつきました。それでありますから、よく叔父さんにも、叔母さんにも、かわいがられていました。叔母さんは、

なにかにつけてもお花を不憫に思つて、「よく、気をおつけ。」と、やさしくいい聞かされました。

けれど、やはりだめでした。お花は、いいつけられた用事を満足にしたことがなかったのです。叔父さんは、

「あの子はだめだ。ほんとうに、ろくな暮らしはしないだろう。」と、叔母さんに向かつていつていられました。

「ほんとうに、困つたものです。」と、叔母さんは、眉をひそめて答えていられました。ある日のこと、叔父さんは、お花が、とても役にたたないから、暇をやってしまふと、叔母さんに向かつていつていられました。

たつ子は、そのそばにいて、いわれたことを聞いていたのでありますが、お花がこれまで自分にやさしかったこと、あるときは、丁寧ていねいに髪かみを結ゆつてくれたこと、あるときは、お手玉てだまを作つくつてくれたことを思い出すと、なんだかかわいそうでなりませんでした。

「叔父さん、お花がかわいそうです。どうかお家に置いてください。」と、叔父さんにお願ねがいいたしました。叔母さんもまた、

「わるいという性質せいしつではなし、気がきかないというだけなのですから、もう一度、よく、

わたしからいい聞かせますから。それで、いけなかつたときに、暇をやることにしてください。」と、頼まれました。

そのときは、二人の言葉に、やむなく、気短の叔父さんも我慢をせずにはいられませんでした。たつ子は、心の中で、もしお花がこの家から出されたら、その先は、どんな家にくくであろうか、どこへいつてもしかられはしまいか、そして、その行く先がいい家ならしいが、もしも、よくない家であつたら、かわいそうだと思いました。もう一つは、お花と別れたら、おそらく、もう永久に、その顔を見ることができないであろうと思つたのでありました。

しかし、お花はどうしても、叔父さんの氣にいらませんでした。そして、ついに、そのお家から暇を出されるようになったのです。お花は、泣いて出てゆきました。そのときたつ子も、どんなに悲しかったでありません。やはり目を真っ赤に泣きはらしていました。そして、「どこへいつても体を大事にしてね。」「遊びにいらつしやいね。」といいました。すると、お花も目から涙を流して、

「どうぞ、お嬢さんも、お達者でいてくださいましね。」と行って、たもとを顔にあてて泣きました。

月日のたつのは早いもので、そのときから、もう六、七年はたちました。その間に叔父さんは、病気でなくなつてしまわれました。ある日のこと、お友だちといっしょに街を歩いていきますと、あちらから子供をおぶつてくる、若い美しい女がありました。で、よくその顔を見ますと、忘れもしないお花でありました。

お花はあののちお嫁にいつて、おかあさんとなつて、子供をもつたのでした。

「お花じゃなくなつて？」と、たつ子は急に声をかけますと、

「ああ、お嬢さんでございますか。こんなに大きくおなりあそばして？」と、お花はびっくりいたしました。

「だんなさま、奥さまは、お達者でございますか？」といつて、お花は、叔父さんや、叔母さんのようすを聞きました。ですから、たつ子は、叔父さんが、おとしなくなられたことを話すと、

「すこしもぞんじませんで……。」「といつて、お花は泣くのでありました。

その日、たつ子は、家に帰つてから、叔母さんの家へいつて、お花に道であつたこと、お花が、いいおかみさんになつて子供をもっていることなどを話しますと、叔母さんは、うなずきなされて、

「よく、ぼんやりしていて、叔父おじさんにしかられたが、あのときは、体からだがよくなかったの
でしょう。しかし、性質せいしつは、やさしい、いい子こだから……。」「といわれました。それに
つけても、お繁しげは、どうなったか、たよりがありませんでした。たつ子は、いまさらなが
ら、人間にんげんの一生しょうは、だれにもわかるものでないことを感じかんじたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

底本の親本：「気まぐれの人形師」七星社

1923（大正12）年3月

※表題は底本では、「人《ひと》の身《み》の上《うえ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2019年2月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人の身の上

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>